

Summary, 6/12/2024

2024（令和6）年6月12日

「無文字言語の文字言語化：100音素を綴るグイ・ガナ母語ライターを生み出す」

企画者：中川 裕（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）

今回の研究会は、進行中の科研費プロジェクト「カラハリ狩猟採集民の持続可能な識字活動の基盤」【挑戦的研究(開拓)22K18249】のこれまでの成果の一部を報告するものである。これは、2024年5月18日に日本アフリカ学会学術大会（大阪大学）で行われたフォーラムでの発表を基にしている。

カラハリ狩猟採集民の言語は、話者共同体や国の教育方針に反して、識字教育がなかなか進まず、開始されても長続きしなかった。そのため、彼らの社会は識字活動から取り残されてきた。この背景には、少なくとも2つの困難が存在する。本プロジェクトでは、グイ語とガナ語（カラハリ・コエ語派コエ・クワディ語族、ボツワナ共和国）を事例として研究しているが、この2つの言語の状況は、これらの困難を典型的に表している。

まず、母語話者個人にとっての困難がある。グイ語とガナ語はカラハリ・コエ語派の中で最も複雑な音韻体系を持つ。この無文字言語を文字で表記するためには、大規模なアルファベット系正書法が必要となる。話者がこの正書法を習得することが識字のために重要である。

次に、当該言語話者社会にとっての困難がある。無文字言語の話者への識字教育は、「紙・鉛筆を使う集団研修」を「外部世話役」が頻繁かつ持続的に支援するスタイルが一般的である。しかし、実際のグイ・ガナ社会では、紙・鉛筆の安定供給が難しく、外部世話役も少ない上、長期間の滞在も難しいため、自律的な集団研修の継続は実質的に不可能である。

これら2つの困難を踏まえ、現地関係者との相互理解と信頼を深める対話的な研究活動を通じて、本プロジェクトがこれまでに得た成果の一部を報告する。まず、1つ目の困難に対処するために、公用語（英語・ツワナ語）の読み書き能力を持つグイ・ガナ母語話者の文字音価知識と嗜好を考慮した正書法体系の設計、および正書法の効果的な訓練のための教材と教授法の開発が不可欠である。また、2つ目の困難に対しては、従来の現地参加型集団研修に代わる新しい遠隔双方向通信型研修の利用が有望であり、それを可能にするための識字学習インフラの整備が重要である。

これらの取り組みに焦点を当て、今回の研究会では以下の二つの報告を行う。

1. 中川裕、大野仁美、ビヘラ・セケレ、ハケドゥメレ・セケレ
「グイ・ガナ正書法の遠隔訓練の成果と文字の表語機能」
2. 加藤幹治、木村公彦
「グイ語・ガナ語の正書法キーボードと綴り方ワークショップ」